



連載

ジョン・アダムズ：
フラワリング・ツリー

※
花咲く木
— / —

アダムズ&セラーズ、 鬼才が蘇らせる 現代の「魔笛」

岡部真一郎 (音楽記者) SHINICHIRO OKABE

《フラワリング・ツリー》は、ジョン・アダムズの《魔法の笛》である。

作品は、モーツァルトの生誕250年を記念するウィーンに於ける「ニュー・クラウンド・ホープ」フェスティバルで、2006年11月14日、作曲家自身の指揮、そしてピーター・セラーズの演出により初演されている。

ザルツブルク生まれの18世紀の天才の音楽が、記念年を新たな「口実」に、日本をはじめ、文字通り世界中に常にも増して溢れていたなか、「ニュー・クラウンド・ホープ」の芸術監督を務めたセラーズは、極めてユニークなアプローチでフェスティバルを構成した。言うまでもなく、彼は、ダ・ポンテ三部作の演出をはじめ、モーツァルトを先鋭な感覚で舞台にかけるアーティストとして名を馳せて来た。例えば、もう何年も前、グラインドボーンでの《イドメネオ》は、サイモン・ラトルの生氣溢れるタクト、アニシュ・カプーアの美しい装置と共に、かの英国の田園風景の中の劇場での近年の最も充実した舞台の一つだったし、あるいは、モーツァルト・イヤー、2006年のウィーン芸術週間での《ツァイデ》は、現代の奴隷問題に焦点を当てながらモーツァルトに取り組んだもので、先頃、エクサプロヴァンス音楽祭でも上演され、キャストの選択を含め、様々な意味で話題を集めたばかりだ。

このように「モーツァルトのスペシャリスト」でもあるセラーズが、他ならぬモーツァルトの街、ウィーンでのフェスティバルの軸に据えたのは、モーツァルトの音楽そのものを演奏することではなかった。むしろ、その演奏をしないこと——モーツァルト作品をステージにかけることなく、しかも、この18世紀後半の天才の考えていたこと、理想、夢を、現代に生き生きと蘇らせようと彼は考えた。そして、名曲の数々を演奏する代わりに、モーツァルトの晩年の作品が扱った世界、そこで焦点が当てられているテーマについて、新たに委嘱された作品を通して、改めて、現代のわれわれが見つけ直すことを目指したのだ。これは、18世紀の音楽の演奏習慣を研究し、資料を再検討しながら、そのエッセンスを生かすことで、改めてモーツァルトを考えようという「時代楽器」「ピリオド奏法」の時間／歴史を遡るアプローチとは文字通り正反対の方向から、しかし、同様の、あるいはそれ以上の実りを現代のわれわれにもたらし得るものだ。

かくして、音楽はもちろんのこと、美術、映画、ダンスなど、様々なジャンルの作品が集められ、あるいは新たに委嘱されて秋のウィーンを彩った。そのなかでも、フィンランドの作曲家、カイヤ・サーリアホがシモーヌ・ヴェイユを扱った《シモーヌの受難》などと並んで、フェスティバルの最大

の目玉となったのが、《魔笛》のテーマにインスピレーションを得た新作、ジョン・アダムズの《フラワリング・ツリー》だったのである。

MQの略称で親しまれるミュージアム・クォーターは、ウィーン旧市街のはずれ、かつての帝国厩舎の跡地を整備したアートセンターである。広大な敷地には、シレーヤクリムトを見るために誰もが足を運ぶであろうレオポルト美術館のほか、様々な文化施設が集まり、現代美術の展覧会などの催しはもとより、おしゃれなカフェ、レストランやショップもある。ウィーンの街のちょっとポッシュなスポットとなって、既に久しい。

記念祭のメインの会場となったそのMQのホールには、国立歌劇場やムジークフェラインなどの誰もが知るウィーンの音楽界の華やかさはまた別の、しかしそれに勝るとも劣らない熱い空気が満ちていた。

全2幕9場、上演時間二時間余りの作品には、アダムズとセラーズの共同作業のエッセンスとも言うべき巧みな構成と、語り口が直接生きるアダムズのスコアの美質もあって、微塵の弛緩もない。終演後、斜め後ろの席に座っていたサイモン・ラトルは、目が合うなり「とても力強い音楽だね」と半ば独り言のように口を開き、微笑んだ。彼は、この世界初演のあと直ぐ、ベルリンで、自らの指揮で作品のドイツ初演を行った。ちなみに、《フラワリング・ツリー》は、世界初演が行われたウィーンの外、ロンドンのバービカンセンター、ニューヨークのリンカーンセンター、サンフランシスコ交響楽団、そしてベルリン・フィルの共同委嘱作品である。

南インドの伝承に基づくストーリー、王子と一人の美しい娘の恋の物語は、シンプルでありながら、同時に奥深くもある。貧しくも美しい少女は、自ら木に姿を変え、見事な花を咲かせる不思議な力を持っていた。彼女はこの秘密の儀式で生み出された花々を売り、体の弱い年老いた母の日々の糧を得ていた。ある日、その花々が王子の目に留まる。その魅力に憑かれたかのように、密かに花売りの後を追った彼は、少女の秘密を知り、その不思議な力と、何より彼女の美しさに魅せられ、結婚を望む。

娘を娶った王子は、盛大な結婚式が終わると、自分のためにも秘密の儀式を行うよう娘に求める。「王子が私と結婚したのは、儀式のためだったのだろうか？」彼女ははじめ躊躇うが、深い愛の証として、木に姿を変え、花を咲かせ、二人は幸せに結ばれる。やがて、二人の秘密を知った王女が、変容の儀式を自分たちにも見せるよう強要する。人々の好奇の目と、邪な欲望、そして嫉妬にさらされながら、木に姿を変えたものの、新妻は、

人に戻るができなくなり、樹でも人間でもないトルソのような姿のまま、行方知らずになってしまう。事の次第を知らない王子もまた、最愛の妻が戻らないことに塞ぎ込み、失意のうちに、放浪の旅に出る。二人を救うことができるのは、彼らを結んだ愛だけだ……

「子供たちよ、物語を聞かせよう。愛と苦しみ、そして再び愛の物語だ。」語り部の言葉で始まるオペラは、この語り部(バス)と、娘(ソプラノ)と王子(テノール)、そして合唱に、ダンサーが加わって進行する。オーケストラは小振りながら、極めて雄弁である。第1幕第2場、花売りの場面の合唱の躍動感、「秘技」の音楽の神秘的な響き、あるいは、第2幕冒頭のヴァーグナーさえ思わせる広がり。そして、超自然的な力で王子と妻が再び結ばれるハッピーエンド。最小限の素材から紡ぎ出されたスコアには、何より音楽そのものの極めて豊かなファンタジーが溢れている。

ピーター・セラーズとジョン・アダムズについては既に多言は不要だろう。東京交響楽団がこのコンビによる《エル・ニーニョ》を日本初演(2003年3月29日第501回定期演奏会)した折の感動が記憶に新しいという聴衆も多いに違いない。パリのシャトレ座に於ける《エル・ニーニョ》世界初演の折、ケント・ナガノの指揮は、精緻ななかにも光り輝くオーラを生み出していた。ロサンジェルスでタクトをとったエサ=ペッカ・サロネンの音楽の輝かしいエネルギーは、クリスマスの時期の西海岸の太陽そのものようにも思われた。そして、そのどちらとも異なる独自の個性を持った東響の透明な響きの音楽が、前回、セラーズから絶賛を受けたことも、知る人ぞ知るところだろう。

そして、この12月、いよいよ、《フラワリング・ツリー》が東京で新たな生を授かる。

第562回定期演奏会
2008年12月6日(土) 6:00p.m. サントリーホール

ジョン・アダムズ：
フラワリング・ツリー ※ 花咲く木
(全2幕、日本初演、セミ・ステージ形式、英語上演、字幕付)

指揮：大友直人 演出：ピーター・セラーズ
クムダ：ジェシカ・リヴェラ(ソプラノ) / 王子：ラッセル・トーマス(テノール)
語り部：ジョナサン・レマル(バス・バリトン)
舞踊：ルシニ・シティ/エコ・スプリヤント/アストリクス・マルダニ
合唱：東響コーラス / 合唱指揮：有村祐輔

S ¥10,000 A ¥8,000 B ¥6,000 C ¥5,000

ピーター・セラーズ講演会 2008年12月5日(金) 18:30～
明治学院大学白金校舎アートホール・入場無料
■主催：明治学院大学/日本アルパイン・ベルク協会
■問 03-5421-5380(明治学院大学芸術学部)



2006年ウィーン初演の舞台より

